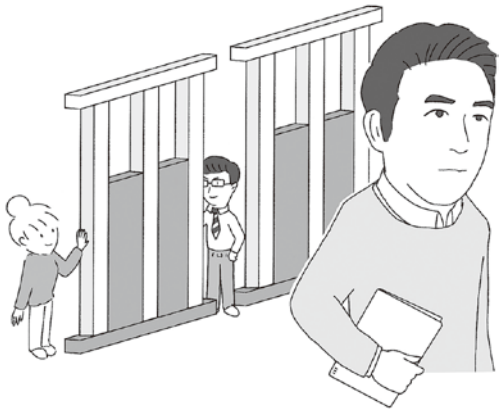
施工者に幸あれ 第77回

領域超え探る構造家
木下洋介

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco



■究極の叱責とは

東京工業大学2年生のときに，金箱温春先生が書いた学内誌の一文を読んで，構造家という職能を知る。構造って面白そうと思い，翌年講師になった金箱先生から授業を受ける。頑張ってやったら覚えてもらえて，興味に拍車がかかる。仙田満先生の下で意匠設計にも携わり，意匠設計の道も考えたそうだ。「デザインの根拠になるものがはっきりせず，スッキリ来なくて」構造を選ぶことにしたという。

大学院では和田章研究室。明るく優しく的確に指導する和田教授も，逆鱗に触れると厳しさを見せたが，構造の基礎を語る際の切れ味の鋭さに驚いたこと思い出す。当時准教授だった坂田弘安教授からは木と鉄筋コンクリートを教えられ，全構造の概要を把握できた勉強一筋の院生時代。建築家・篠原一男が設計した別荘で初めて構造設計をしたが，篠原先生が体調を崩されアンビルドになったのが残念でした。

金箱先生のご厚意で会社訪問が行われたとき，住所録の隅に「模型が得意です」と書いてアピール。お茶目な積極性か実力かでアルバイトに採用され，大学院卒業時に金箱先生からのお誘いで入社した。

金箱先生の見事な教育エピソードがある。遠方での構造検査に1時間半遅刻して，皆さんを待たせてしまった。先生は淡々と検査を終えて，何の注意を受けないないままに帰社したところ，ロッカーにコートを入れた瞬間，「みっともない」とただ一言。寝坊して布団の上に正座で電話し，究極の諭しに震えた木下さんの姿を想像すると吹き出してしまいそう。構造家・金箱温春先生の教育者としての凄さです。

■プラスαを目指す

JSCA第27回新人賞を受賞した「オガールベース」は公民連携事業（PPP事業）で，岩手県紫波町にあるユニークなまちづくり事業の中心施設だ。地場産材を利用して地元の施工業者による施工。RC柱と集成材柱を交互に配置した「木+RC櫛型耐震壁」を考案した。住宅用流通サイズの集成材を使い，施工方法にも工夫を凝らしてコストダウンする。町内の施工者が工法の指導に従い，支障なく施工できたのも特記すべきところだ。木下さんは，構造設計を縦軸に技術力，横軸に社会への対応性や文化に貢献することを意識している。特に地方では，資金不足から組織やゼネコンが手を出せない分野があり，構造種別を超えて柔軟にオリジナリティのあるものをつくっていきたいと。例えば，木造なら木造の技術だけにこだわってつくる必要はないという合理的な考え。

■自由が手に入るアトリエ事務所

アトリエ事務所の方が，総合的な設計力は身に付けやすい。8年間で約50件以上の多様な構造体や用途の建築をやらせてもらい，どんな構造体にも対応できる能力がついた。独立して二人目の子供ができたのを機に，朝型の生活スタイルに変えた。『子育てしながら建築を仕事にする』（成瀬友梨 編著，学芸出版社）に執筆したとおり，4時起床，出社して7時まで自分にしかできないことをする。8時に所員が来るまでは喫茶店で朝食と読書。夕方6時には家族とご飯，子供とおもいっきり遊んで消灯は9時。

覇志堂Jr.からの「若い人へメッセージを」の答えは，「アトリエで力をつけたら自分流の生き方ができる，自由になれる！」。小学校の卒業文集に「将来は建築家になりたい」と書いてあり，自分でも驚いたらしい。「天然です」と言うけれど，その端正な眼差しには強い意思が見える。構造家・木下洋介さんは領域を超えて，社会や文化に貢献する存在になりそうだ。